▲多くの観光客で賑わう小布施町

支部見聞録（信越支部）

From 小布施

独自の気風が成功に導いたまちづくりの軌跡

長野市街の北東10kmほどの場所にある小布施の町。人口約1万2千人のこの町は、1980年代に始まった独自のまちづくりによって、今や年間120万人が訪れるまでになっている。住む人にとって心地よく、次代に残すにふさわしい環境づくりから始まり、結果として観光と地域の振興の大きな力となった小布施のまちづくりはどのように行われ、小布施に何をもたらしたのだろうか。

▲カフェとして使われている建物

▲「Open-Garden」が掲げられている個人宅

始まりは環境を整備する「修景事業」から

長野電鉄小布施駅の駅前は、何の変哲もない田舎町の風情だが、町の中心地区へ向かうと、白や土色の壁に瓦屋根をいただいた建物が緑陰にたたずむ、美しい風景が見えてきた。勾配を揃えて重なる甍（いらか）の波、広場には笹に覆われた築山があり、その向こうにカフェの白いパラソルが開く。かつて酒蔵だった建物は内部が改装されてレストランになり、オープンキッチンに大きな竈（かまど）が据えられているのが見える。歩道には栗材のブロックが敷かれ、建物の間を風情豊かな路地が伸び、奥にある個人の邸宅の門には「Open-Garden」の表示が掲げられている。驚いたことに庭を万人に開放しているのだ。

▲食事処になった古い酒蔵。山の稜線に揃う屋根の連なりが美しい

小布施は商業で栄えた町で、幕末にはこの地の豪商で文化人として名高い葛井鴻山（たかいこうざん）のもとに晩年の葛飾北斎が滞在し、小布施に数多くの作品を残したことでも知られる。1976（昭和51）年、町内の北斎作品の散逸を防ぎ、作品の研究展示を行うために北斎館がつくられた。観光とは縁遠かった小布施に、町外から年間5万人が訪れるようになり、さらに町当局は鴻山ゆかりの建造物を記念館に整備して1983（昭和58）年を目途にオープンする構想を打ち出した。

町並み整備の取り組みが始まったのは、これがきっかけだった。記念館ができればさらに人も来る。これに対応するだけでなく、古いままでさまざまな不便や問題の出ていた生活環境を改善し、後世に受け継ぐにふさわしい空間を創り上げようと、記念館周辺150m×200mの住人や商売を営む人々が動き出したのだ。町外から建築家宮本忠長さんの協力を仰ぎ、ここで栗菓子製造販売業を営む小布施堂、2軒の個人宅、長野信用金庫と記念館を建てる町当局によって、2年間徹底的な話し合いが重ねられていく。町の参加はあくまで当事者としてのもの。行政のリードによるものではなく、住民の自主的な生活環境の整備として計画は

取材・写真協力／小布施町地域創生部門地域整備グループ、㈱ア・ラ・小布施、信州・長野県観光協会

▲「栗の小径」。栗材のブロックを敷き詰めた歩道は木の温かみが伝わり散策が心地よい

▲古民家の蔵を改造したゲストハウス

進められた。

町並み整備は、個人の住居でも外から見える部分は景観との調和に配慮する「内は自分のもの、外はみんなのもの」という考えを基本に、「修景」と呼ばれる手法がとられた。修景とは古い建築がもつ良さを活かしながらも建物と周囲の環境に手を入れて、一定のイメージのもとにまとめあげる手法で、昔のままの復原を目指す町並み保存とは大きく異なる。景観を整え、生活環境を改善するために、地割りの変更や曳家（ひきや）（建物の移動）といった手段もとられた。公共への土地提供や五者間で土地の交換や賃貸借も行われたという。この町並み修景事業は高く評価され、日本建築学会文化賞など数々の賞を受賞。「外はみんなのもの」の理念や修景の考え方は町民にも浸透し、美しいまちづくりへの取り組みは修景地区から外へ、広がりを見せていく。

まちづくりを成功させた小布施の特性

修景地区のすぐ北側では、小布施の文化や産業振興につながる事業を行う第三セクターの㈱ア・ラ・小布施と、その拠点となるガイドセンター建設用地の隣家によって、次なる修景事業も行われた。折しもその家が母屋を移す必要に迫られていたため、修景の手法で母屋を建て直すと同時に、ア・ラ・小布施が納屋と土蔵を借りて有料宿泊施設「ゲストハウス」に改造したのだ。この町ではア・ラ・小布施のような事業は自立経営が大原則。「町になかった宿泊施設を整えると同時に、活動経費を賄おうというわけです。ゲストハウスは人気も高く、経営も順調です」とア・ラ・小布施企画部長、関悦子さんはいう。

町当局も環境デザイン協力基準を制定したり修景への助成を行うなどまちづくりのバックアップを続けている。2000（平成12）年からスタートした個人宅の庭を開放するオープンガーデンには現在では120軒が参加している。小布施町地域創生部門の勝亀（かつまた）達夫さんによれば、「町としては、町中心部に残る貴重な藁葺き家屋を活かすために町外の企業の協力を仰いだり、農村部での景観整備や活性化も促進しています。民間の動きも活発ですよ」という。さらに、まちづくりの新しい段階として、町では東京理科大学と協働して2005（平成17）年、役場の2階に「東京理科大学・小布施町まちづくり研究所」を創設した。理工学部建築学科の川向（かわむかい）教授の研究室の面々がここを拠点に建物や道、水路などの調査にあたり、今後に活かすべくまちづくりの研究を行っている。

◀和製灯火具が展示されている「日本のあかり博物館」の街灯

▲葛飾北斎 八方睨み鳳凰図（岩松院）

▲北斎が天井絵を描いた祭り屋台（北斎館）

小布施で驚かされるのは、修景事業に見るように住民の自主活動が非常に活発なことだ。自主自立の気概に加え、小布施のまちづくりが成功した理由としてよく言及されるのは、豪商が活躍した歴史を背景に歴代町長をはじめ先見性のある強力なリーダーが活躍しやすい土壌があること、町外から訪れる人やその意見を積極的に受け入れる気風があることだ。高井鴻山に連なる一族で地区住人と小布施堂副社長双方の立場から修景事業にリーダーシップを発揮した市村良三さんは、2005（平成17）年から町長として町政を牽引している。小布施の㈱枡一市村酒造場に入社したアメリカ出身のセーラ・マリ・カミングスさんの活躍と目覚ましい業績は広く全国に知られるところだ。また、まちづくりでは今も外部から専門家を招いて意見を聞くといったことが盛んに行われている。勝亀さんによると、町では若手起業家や新規就農者の受け入れも促進していて、2012（平成24）年9月には全国から参加者を集め、地方のさまざまな課題解決に向けた意見交換と提案を行う「小布施若者会議」を開催した。こうした開かれた気風は商人の町ならでは。関さんいわく「鴻山も佐久間象山や北斎を招いて外からの新風を呼び込みました。そうした気風が小布施には受け継がれています」。

実はかくいう関さんも勝亀さんも、「外からの新風」のくちだ。関さんは町が1970年代に人口減対策として分譲した宅地（収益は北斎館開設の資金になった）に移り住み、勝亀さんは川向研究室の学生として来た縁で小布施町に就職したのだという。小布施を愛し、いきいきとまちづくりに奔走する―― そんな彼らの姿にも、小布施の活力と魅力の奥深さを見る思いがした。

別冊 FROMはウェブサイトへ
eふぁみり もあわせてご覧ください!
eふぁみり
http://jp.fujitsu.com/family/honbu/family/